

## コラム：吉田公平先生

(東洋大学名誉教授)

### 中江藤樹は模範生ではなかった



模範とは鋳物の鋳型のことで

ある。かつて「遊び鯛焼き君」という童謡が流行したが、あの鯛焼き君は、誰が焼いても何度繰り返しても同じ形の鯛焼き君ができてあがる。鯛焼き君だけではない。南部鉄瓶でも大判焼きでも同じである。この模範の反対語は「奇妙」である。「あの人は奇妙だね」といえば、褒め言葉ではなく、常識外れのおかしな人という意味で使われる。しかし、これは本義ではなく転義である。あの人は模範生だねという場合は、天下公認の考え方や振る舞いの人は「模範生」であると賞賛される。小学生の頃の通信簿は五点から一点か、あるいは優・良上・良下・可・不可であった。五点・優が模範生である。マニュアル通り、型通りの人である。今はどうなっているのかは知らない。昔、左とん平

という人の『奇人でけっこう』という著書があった。型破りでも自分らしさのままに生きた人生を回想した自叙伝である。自分らしさを發揮した、獨創性に富む作品を評価する時の標語は「奇」「奇妙」(エクセレント・素晴らしい)である。その文学作品に対する絶賛の標語である。

さて中江藤樹は、時代の転換期に生涯を過ごした。旧来の型(マニュアル)のままに生きる事もできずに違くない。祖父は武士である。しかし、祖父は戦国時代の武士の時代は終わったことを熟知していた。だから孫の藤樹には兵術(殺しの術としての兵学は教えないで、平和の学である儒学)を学ぶように勧めて儒学書を買いはじめた。父は武士をやめて農民になった。人殺しを生業とする武士を拒否して、食料生産に従事する農民を選んだ。祖父も父親も共に「殺し」の人ではなかった。中江藤樹が大洲藩を脱藩したのは、旧来の模範から抜け出した祖父・父親の素地を受け継いだのか。祖母も母親も、女性だからそもそも「人殺し」とは無縁である。脱藩は国法違反である。追討人が派遣されて発見された場合、処刑されるのが通常である。「型破り」をした中江藤樹は追討されて処罰されることを覚悟していた節が

ある。なぜそこまで知りながら脱藩したのか。家老に出国を申請したが許されなかった。どうしても郷里に帰り母と共に暮らしたい、という思いが強かった。単なる故郷思いではない。一人住む母を見棄てることはできなかった。「殺し」の時代の型に囚われることはなかった。模範生をやめたのである。

### 吉田公平先生のご紹介

#### 【経歴】

東北大学文学部・大学院 中国学専攻。  
九州大学助手、東北大学助教授、広島大学教授を歴任。東洋大学文学部教授、東洋大学名誉教授(現在に至る)。現在、東京で、「心の学び 吉田塾」を月一回開催。

#### 【専門分野および研究テーマ】

中国哲学、日本思想史。最近は、江戸時代、明治・大正時代の心学・陽明学の研究が主題。

#### 【所属学会】

日本中国学会、日本思想史学会、東北中国学会、白山中国学会、東洋古典学研究會

#### 【主要著書・論文】

- ① 『陸象山と王陽明』(研文出版)、
- ② 『陽明学が問いかけるもの』(同上)、
- ③ 『日本における陽明学』(ペリカン社)、
- ④ 『中江藤樹心学派全集』(研文出版)、
- ⑤ 『中江藤樹の心学と会津・喜多方』(同上)、他多数。

## ひじりの声

上田 藤市郎

科学技術の進歩は、私たちの心に潤いを約束するものではない。インターネットの普及によって、個人の意見が、急速に不特定の多数の人々に伝播し、予想できない変化を遂げながら拡散して人の心を傷つけ、情け容赦のない誹謗中傷の応酬を招いている。ネット社会の弊害の結果がこれである。

政治、経済、文化、宗教、思想、歴史などのいづれにも違いがあることはだれもが認めるところである。しかしながら、その違いに対してどのような対応をするのかが問われるのである。ネット上での誹謗中傷の根源は、違いを認めない、さらには意見の異なる相手を実力で排除しようとする。

ロシア・ウクライナの戦争、イスラエル・パレスチナ紛争、中国、ロシア、ミャンマー、北朝鮮などの独裁国家は、この実例である。相手の状況に対する想像力や配慮がなく、自己の権益第一、自分は正義で、異端者は悪者、敵なのであり、解決のための相互理解や共益を探る考えをもたない。民主主義の理念に沿って選ばれている人々、これらの人々を仮に指導者と呼ぶとすれば、意見の相違の前に、普遍的な相互の存在の価値、人間の尊厳への敬意と謙遜的態度が求められる。ネットユーザーは、「五事を正す」の「言」「聴」「思」を実践してもらいたいものである。